



平成20年度 郷土資料館特別展

「ジョセフ・ヒコ」 Joseph Heco

播磨町で生まれた「新聞の父」ジョセフ・ヒコが1858年にアメリカの市民権を得てから、今年で150周年となります。

⑤ 神戸で行ったこと

今月は、ジョセフ・ヒコが神戸で行ったことを紹介します。精米用の蒸気機関を利用して、神戸で初のあることをしました。



▲兵庫県を代表する人として紹介されています

【ヒコ・クイズ】 神戸で初めての試みとは、次のどれでしょう。

- ①電気を起こして、電灯をつけた
- ②蒸気で、ビル暖房をしてみせた
- ③蒸気機関車をつくって走らせた

長崎を中心に活躍していたジョセフ・ヒコは、1875年からは神戸に移り、やはり貿易商を行っています。当時、居留地での外国貿易は外国籍の人しかできないため、神戸で力があった北風家の「お茶」の貿易部門を任せられました。住んでいた家は、今の県庁の西、神戸市中央区中山手通6丁目2にありました。

この事業は、長続きするかに見えましたが、現実の北風家は政治の変化の中で少しずつ財力が傾いており、翌年の1867年には、この部門をジョセフ・ヒコ単独の事業にします。その後、北風家は1896年に断絶となります。

思いがけない時の流れの中でも、ジョセフ・ヒコは、能福寺のいわれを英文で書いたり、1884年には、精米用の蒸気機関で、神戸では最初の電気を起こし、電灯をつけたりして、文明開化の一翼を担っていました。そして、神戸には1886年までいて、心臓病の治療のため1887年には東京に移り、10年後に亡くなります。

ジョセフ・ヒコの生涯を振り返るとき、少年期を除くと、神戸での住まいは最も長く12年間もありました。この時は、もう政府との関係も薄くなり、自分の経験を地域の人に語りながら、地域の人もともに穏やかに過ごしたと考えられます。

今、中山手通6丁目2の地にはマンションが建っています。その入口近くに「ジョセフ・ヒコ氏居址」という碑があります。その文面から、神戸市でもジョセフ・ヒコを誇り思う人々がいることがわかります。

(郷土資料館 田井恭一)



● クイズの答 ●

- ① 電気を起こし、電灯をつけた

【問い合わせ】郷土資料館 ☎079 (435) 5000

絵ものがたり『ジョセフ・ヒコと洋式帆船の男たち』(播磨町ふるさとの先覚者顕彰会) 発売中2,500円

町の人口 7月1日現在 (住民基本台帳人口+外国籍人口)

34,330人(+14人)	男...16,841人(+10人)	世帯数...13,358(+22)
	女...17,489人(+4人)	

